

日本語学習者による人称表現の使い分け

—日本語母語話者との手紙交換活動の分析より—

高橋 美奈子

1. はじめに

2002年10月、高知大学にて「日本語のバリエーションと日本語教育」というテーマで日本語教育学会秋季大会が開催された。大会のシンポジウムでは、日本語における地域差、性差、世代差などの変異（バリエーション）をどこまで日本語教育で取り扱い、どのように指導するのかという内容が取り上げられた（日本語教育学会 2002）。シンポジウムでダニエル・ロング氏は、日本語学習者がそのような日本語の様々な変異を使用する場合、本人がその語彙を使用するメリット・デメリットを意識して選択しているのかどうかということが重要であると述べていた。このことは、近年よく話題にされる「ぼく」「おれ」のような従来男性語と言われる自称詞を使用する日本人女性を例にあげると分かりやすい。従来の性規範に従うと、女性の男性語使用は「女性らしくなくけしからん」と否定的に受け取られるデメリットがあるが、女性たちは男性語を使うことで単に男性的に見せたいのではなく、むしろ、仲間内で使うことにより互いの親密さを深めたいというメリットを得るために使用しているのだ（Okamoto 1995）。このように言語変異の選択は、相手や場面により受け取られ方も異なるので、日本語学習者にとっては困難を伴う。特に、適切な言語変異の選択使用を誤ると、他の言語形式上の文法や音声の誤りとは異なり、使用している人間の人格の受け取られ方に影響を与えかねない（Thomas 1982）。

一般的に日本語の人称表現は、他の言語に比べ、地域差、性差、世代差もあり、変異が多いと言われる。これまで日本語母語話者による人称表現の使い分けについての調査は様々な場面において数多くなされているものの、日本語学習者による人称表現の使い分けの実態調査は管見では見当たらない。

日本語教育で言語変異をどのように扱い、どこまで指導するのかということを考える上で、まず学習者による人称表現の使い分けの実態を把握することが必要であろう。本稿では、沖縄県で生活する日本語学習者と同世代の日本語母語話者を対象に、両グループ間の人称表現の使い分けにどのようなバリエーションの相違があるのかを、アンケート調査と手紙による自然会話分析により明らかにすることを目的とする。また、高橋（2001）で行われた沖縄県在住女子大学生の人称表現の使い分け結果と照らし合せながら、日本語学習者の人称表現使い分けにおける地域語⁽¹⁾の影響も検討する。

2. 調査方法

本調査は2002年5月から7月にかけて、2つの大学における筆者の受け持ちクラスにおいて実施した。一つは、沖縄県内の大学に在学中である中・上級レベルの日本語学習者33名を、もう一つは県内の別の大学に在籍する日本人大学生33名を対象に行った。日本語学習者は主に中国出身者で、日本語学習歴は1年から4年4ヶ月（平均1年11ヶ月）である。一方、日本人大学生は日本語教育主専攻に在籍する学生である。本調査は、(1)日本語学習者による人称表現の使い分け意識を探るためのアンケート調査、(2)日本語学習者と日本人学生とのペンパルプロジェクト（手紙交換活動）の中で書かれた手紙中に表れる人称表現の実態調査、の2種類から構成されている。

まず、(1)の日本語学習者に対してのみ行ったアンケート調査の概要であるが、アンケート項目は次の通りである⁽²⁾。

- ① 日本人の友人と話すときに自分のことを何と言うか(自称詞・話し言葉)
- ② 日本語で作文を書くときに自分のことを何と言うか(自称詞・書き言葉)
- ③ 日本人の友人と話すときに相手のことを何と呼ぶか(対称詞・話し言葉)
- ④ 日本人の友人に手紙を書くときに相手のことを何と呼ぶか(対称詞・書き言葉)
- ⑤ 自称詞としての「自分」・「名前」の使用を正しいと思うかどうか、丁寧だと思うかどうか（沖縄県内で使われる語の影響）

⑥ 沖縄県内で使われる地域語としての自称詞・対称詞の認識度と使用度

アンケート調査は、できるだけ被験者が普段の言語運用を思い起こし易いように自由回答とはせず、筆者が各場面において予め考えうる自称詞・対称詞を選択肢として与え、被験者はそれぞれの自称詞・対称詞について、「言う」「言わない」「わからない」のどれかに○をつけるという回答方法をとった。

なお、アンケート調査における日本語学習者の被験者は、33名のうちの29名⁽³⁾である。不参加者4名は、アンケート当日に欠席であった。

(2)のペンパルプロジェクトとは、日本語学習者と日本語母語話者との手紙交換活動のことで、2種類のクラス間で行った。一つは、日本語学習者を対象にした「日本語作文Ⅰ」クラスで、このクラスの受講生は上述したアンケート調査の被験者でもある。もう一つは日本語教育専攻に在籍中の学生を対象にした「日本語教授法」クラスである。これら2つのクラスの日本語学習者と日本人学生が1対1のペアとなり、3ヶ月間に渡って手紙を交換した。授業開始当初はそれぞれの授業の一貫として行った。「日本語作文Ⅰ」クラスでは手紙の書き方を学習し、その後実践的な練習としてこのプロジェクトを取り入れた⁽⁴⁾。本プロジェクトは、より現実的な状況を設定し、日本語で書く意義を見出すことにより、書く量・書く楽しさを増加させるという目的で行った。一方、「日本語教授法」クラスでは、学習者の誤用の実践的な指導法を考える目的で行ったので、日本人学生は学習者のペンパルであると同時に、学習者の手紙中の誤用を訂正する役割も担った。

表1 手紙交換活動のデータ

	総参加者数	手紙回収者数	総手紙回収数	平均手紙回数	最大手紙回数	標準偏差
日本語学習者	33名(100%)	25名(75.8%)	65通	2.1回	5回	1.6
日本人学生	33名(100%)	26名(78.8%)	97通	3.1回	6回	1.9

手紙交換の手順は、まず、日本語学習者がポスターを作成し、日本人のペンパルを募集することから始まった。全く面識のない日本人学生がその募集ポスターを見て、ペンパルを選択し手紙を書き、筆者が2つのクラスの学生により書かれた手紙を互いの学生に運んだ⁽⁵⁾。

手紙交換は日本語学習者、日本人学生とそれぞれ33名⁽⁶⁾ずつ1対1で行ったが、手紙という性質上、今回の調査では被験者から了解が得られた手紙のみ活動終了時の7月に回収した。表1に手紙の回収率と各人が手紙を書いた回数を示した。手紙を1通でも調査データとして提供してくれた被験者数は、日本語学習者が33名中25名⁽⁷⁾ (75.8%)、日本人学生が33名中26名⁽⁸⁾ (78.8%)である。回収された総手紙数は、日本語学習者が書いたものが65通、日本人学生が書いたものが97通である。プロジェクトを行った3ヶ月間を通して各人が手紙を書いた回数は平均で2～3回であり、最も多い人でも5～6回であった。本調査では、これらの回収された手紙の中に表れた自称詞・対称詞を分析する。

3. 分 析

3.1 アンケート調査の分析

表2から表5は日本語学習者を被験者としたアンケート調査に基づく結果を整理したものである。

表2 自称詞の使用率 (() 内の数は回答者数)

自称詞(話し言葉)	わたし	ぼく	おれ	自分	名前
言う	100% (29)	34.5% (10)	6.9% (2)	48.3% (14)	10.3% (3)
言わない	0% (0)	62.1% (18)	89.7% (26)	51.7% (15)	89.7% (26)
わからない	0% (0)	3.4% (1)	3.4% (1)	0% (0)	0% (0)

自称詞(書き言葉)	わたし	ぼく	おれ	自分	名前	わたくし
言う	96.6% (28)	20.7% (6)	3.4% (1)	34.5% (10)	3.4% (1)	34.5% (10)
言わない	3.4% (1)	79.3% (23)	93.1% (27)	62.1% (18)	89.7% (26)	58.6% (17)
わからない	0% (0)	0% (0)	3.4% (1)	0% (0)	0% (0)	6.9% (2)

まず、表2で示した自称詞の使い分けについて検討する。友人に対しての話し言葉においても、作文の中での書き言葉においても、「わたし」という自称詞は大変使いやすいことが分かる。高橋(2001)の調査では、沖縄県内の女子大学生に最もよく使用される自称詞は「わたし」よりも「自分」や「名前」であったが、本調査結果においてはそのような地域語の影響が見られない。「わたし」という自称詞使用が最も多いという本調査結果の要因は、一般

的に日本語教育の教室場面では必ず始めに自称詞としての「わたし」を導入することや、日本語教科書で必ず取り上げられていることの影響であると考えられる。また、沖縄県内の女子大学生によく使用された自称詞としての「自分」や「名前」では、話し言葉において14名（48.3%）が「自分」を自称詞として使用すると回答しているものの、「名前」を「言う」と回答した人はわずか3名（10.3%）にすぎない。沖縄県内では、「自分」は話し言葉でも書き言葉でもよく使用されるが、「名前」は話し言葉で主に使われ、しかも若い女性によく使用されていることから、そのような場面の使用制限が多い人称表現は使用しづらいと解せる。また、従来男性語と言われている「ぼく」「おれ」については、男性被験者17名のうち10名（71.4%）が「ぼく」を「言う」と回答しているが、「おれ」の使用率は低い。この結果も、「ぼく」が話し言葉と書き言葉ともに使える一方、「おれ」は話し言葉でのみ使用されるという制限があるからであろう。更に、近年、「ぼく」「おれ」を自称詞として使用する若い日本人女性の存在が話題になるが、本稿の調査では、女性被験者で「ぼく」「おれ」を「言う」と回答したものはいなかった。

日本語学習者にとっては、やはり話し言葉でも書き言葉でも使えるような自称詞（「わたし」や「ぼく」、「自分」）は使いやすいが、話し言葉でのみよく使われる自称詞（「おれ」や「名前」）は使いづらいことが明らかになった。

表3 対称詞の使用率（（ ）内の数は回答者数）

対称詞 (話し言葉)	名字	名字+さん	名字+くん	名前	名前+さん	名前+くん	フルネーム	フルネーム +さん	フルネーム +くん
言う	48.3% (14)	89.7% (26)	24.1% (7)	51.7% (15)	69.0% (20)	24.1% (7)	17.2% (5)	41.4% (12)	17.2% (5)
書かない	48.3% (14)	6.9% (2)	75.9% (22)	48.3% (14)	27.6% (8)	75.9% (22)	79.3% (23)	55.2% (16)	82.8% (24)
わからない	3.4% (1)	3.4% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)	3.4% (1)	0.0% (0)	3.4% (1)	3.4% (1)	0.0% (0)

対称詞 (書き言葉)	名字	名字+さん	名前	名前+さん	名前+ちゃん	フルネーム	フルネーム +さん	あなた	おまえ
言う	31.0% (9)	86.2% (25)	44.8% (13)	86.2% (25)	58.6% (17)	13.8% (4)	48.3% (14)	37.9% (11)	0.0% (0)
書かない	69.0% (20)	10.3% (3)	51.7% (15)	10.3% (3)	37.9% (11)	86.2% (25)	51.7% (15)	62.1% (18)	100% (29)
わからない	0.0% (0)	3.4% (1)	3.4% (1)	0.0% (0)	3.4% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)

次に、対称詞の使い分け結果を表3に示した。高橋によると、沖縄県内の女子大学生は友人を話し相手とする場合、「名前」や「名字」の後に「くん・

ちゃん」などの敬称はほとんど用いず、相手の性に関わらず「名前」の呼び捨てを多用した。しかし、本調査結果では、友人への話し言葉においても手紙中の書き言葉においても「名字」や「名前」に「さん」を付けた対称詞が最も多い。現在、日本で最もよく使われている日本語教科書『みんなの日本語』⁽⁹⁾を見ると「～さん」という対称詞の出現頻度は他に比べ非常に高い。この点から推察しても、「～さん」の多用には日本語教育の影響が窺える。また、本調査の「対称詞」（話し言葉）の調査項目において、対称となる友人の名前は「山田たけし」と男性名であったが、「～くん」を「言う」と回答した人は少なかった。この結果は、一般的に言われるように、外国語学習者が日本人の名前だけを見て男女の区別をすることが難しいという要因にもよるだろう。

表3で、「あなた」⁽¹⁰⁾という対称詞を見ると、書き言葉において「言う」と回答したのは11人（37.9％）であった。杉本（1998）は、代表的な日本語初級教科書に表れる「あなた」の分析を行ったが、「あなた」を全く使用しない教科書から「あなた」が頻出するものまで様々であった。また、「あなた」の使用制限については、「妻から夫」に対しての発話例だけを挙げた教科書や、「あなたは～」と話しかけると直接的過ぎるので使わないほうがよいといった説明書きの教科書があった。しかし、杉本が指摘するように、現実の会話において「あなた」は他にも様々な場面で使用されている。このように、日本語教科書において「あなた」の取り扱い方が多様であるということは、日本語教育現場においての指導も様々であると考えられ、それゆえに、学習者はどのような場面でどう使えばよいのか分からず、本調査においても回答が分かれたのではなかろうか。

表4 正確さ・丁寧さの認識（全体数29名を100％とした割合、（ ）内の数は回答者数）

正確さ	友人			丁寧さ	友人		
	自称詞 （自分）	自称詞 （名前）	自称詞 （自分）		自称詞 （自分）	自称詞 （名前）	自称詞 （自分）
正しい	58.6% (17)	37.9% (11)	10.3% (3)	丁寧である	17.2% (5)	3.4% (1)	17.2% (5)
正しくない	34.5% (10)	44.8% (13)	79.3% (23)	丁寧ではない	55.2% (16)	62.1% (18)	65.5% (19)
わからない	6.9% (2)	13.8% (4)	10.3% (3)	わからない	17.2% (5)	27.6% (8)	10.3% (3)

表4では、地域呼称の影響を検討すべく、高橋の調査結果で表れた沖縄県内でよく使われる自称詞について、日本語学習者の認識判断結果を示した。まず、正確さについては、友人への話し言葉において、自称詞として「自分」を使うことを「正しい」と判断した人が58.6%であり、自称詞として「名前」を使うことを「正しい」と判断した人は37.9%である。これらの人称表現を「正しい」と回答した理由については、「沖縄県の人が使っているから」というのが多かった。丁寧さについては、これらの自称詞がくだけた場面での話し言葉としても頻繁に使われるせいか、どの自称詞についても「丁寧ではない」と回答した人が多かった。また、沖縄県内では、特に先生を話し相手とするような改まった場では、「自分」を自称詞として使うことが多いが、本調査結果においては、「正しくない」「丁寧ではない」の回答者が多かった。つまり、本調査結果から、友人を話し相手とした際に使われる自称詞としての「自分」以外は、地域語の影響は見られないことが明らかになった。この要因として、他地域での標準語による日本語学習の影響が考えられるが、この点の解明については今後の課題としたい。

最後に、沖縄県内で使用される方言呼称についての認知率と使用率の結果を表5に示した。これらの呼称は沖縄県内で生活していると、県内で流れるテレビコマーシャルで聞いたり、年代に関わらず男性が使ったりしているのを耳にする。しかし、表5の結果から分かるように、多少聞いたことがある学習者がいるものの、使ったことがない者が大半を占める。すなわち、上述した「名前」や「おれ」同様、方言呼称も仲間内や親しい人間関係の話し言葉でよく使われ、場面の使用制限が多い人称表現であるがゆえに、日本語学習者にとっては使いづらいことを表しているのだろう。

表5 方言呼称についての認知率・使用率（（ ）内の数は回答者数）

方言呼称 標準語訳	わー わたし	わったー わたしたち	やー あなた	やったー あなたたち
聞いたことがある	34.5% (10)	6.9% (2)	31.0% (9)	27.6% (8)
聞いたことがない	55.2% (16)	86.2% (25)	62.1% (18)	65.5% (19)
使ったことがある	13.8% (4)	0.0% (0)	6.9% (2)	10.3% (3)
使ったことがない	72.4% (21)	89.7% (26)	82.8% (24)	75.9% (22)

3.2 手紙交換活動調査の分析

次に、手紙交換活動で書かれた手紙中に表れた自称詞・対称詞の使い分けを、日本語学習者と日本人学生とを比較しながら考察する。各調査結果を整理したものを表6と表7に示す。なお、本調査では、宛名や差出人名として使われた自称詞・対称詞は調査対象に含めず、手紙の本文中に表れた人称表現のみを調査対象とした。

表6 自称詞の使用率（（ ）内の数は回答者数）

自 称 詞		わたし	自分	僕	名前	あたし	シフト(異)	シフト(同)
日本語 学習者	使用者数	96% (24)	36% (9)	4% (1)	0% (0)	0% (0)	0% (0)	24% (6)
	延べ使用回数	277	24	1	0	0	0	19
日本人 学生	使用者数	84.6% (22)	11.5% (3)	11.5% (3)	7.7% (2)	7.7% (2)	7.7% (2)	15.4% (4)
	延べ使用回数	321	4	18	2	4	2	10

まず、日本語学習者の使い分けを3.1でのアンケート調査結果と照らし合せながら検討する。アンケート調査結果同様に「わたし」の使用者が最も多い。しかし、アンケート調査では、男性被験者の71.4%が友人に対して「僕」を「言う」と回答していたが、手紙交換活動調査で使用していた者はわずか1人にすぎない。また、「自分」もアンケート調査で「言う」と回答した人は48.3%であったが、手紙交換活動調査では、36%と若干低めである。つまり、アンケート調査の際の自らが感じている意識より、実際の手紙中の使用では自称詞の変異が少ないことが認められる。ただし、3ヶ月の間手紙を交換しあったとはいえ、日本語学習者は平均2回ほどしか手紙を書いていないので、互いの親しさに変化が生じず、使い分けの必要性がなかったことが一因として予測される。

一方、日本人学生の使い分けでは、日本語学習者同様に「わたし」の使用者が最も多いが、男性被験者の5名中3名が「わたし」を一度も使用せず、「僕」のみを使用していた。また、日本人学生の中には「名前」や「あたし」を使用する人がおり、日本語学習者よりも自称詞の変異が豊富であった。

次に手紙中における自称詞のシフト（変移）について考察する。表6と表7において「シフト（異）」とは、異なる回における手紙のシフトで、「シフ

ト(同)」とは1回の手紙中に表れたシフトを示す。日本語学習者には、異なる手紙間における自称詞のシフトは見られなかったが、1回の手紙中におけるシフトを行った者が6人いた。6人による延べ17回のシフトは「わたし」から「自分」へ、「自分」から「わたし」への相互シフトであったが、1人だけ「自分から僕」「僕からわたし」へのシフトを行っていた。一方、日本人学生には、異なる手紙間におけるシフトを行った者が2人おり、2人とも「わたし」から「名前」へのシフトであった。手紙交換の回数が増えると、よりくだけた自称詞である「名前」へシフトされていた。1回の手紙中でシフトをした者は4人おり、日本語学習者同様に「わたし」と「自分」の相互シフトをした者が2人(延べ4回)、「わたし」と「あたし」の相互シフトをした者が2人(延べ6回)であった。

表7 対称詞の使用率(()内の数は回答者数)

対 称 詞	フル+さん	名字+さん	名前+さん	あなた	ニックネーム	名前	名前+様	名前+ちゃん	シフト(異)	シフト(同)
日本語 学習者	使用者数 8% (2)	12% (3)	76% (19)	12% (3)	0% (0)	28% (7)	4% (1)	8% (2)	20% (5)	32% (8)
	延べ回数 4	12	139	10	0	24	1	15	5	14
日本人 学生	使用者数 23.1% (6)	58.4% (14)	30.8% (8)	30.8% (8)	15.4% (4)	7.7% (2)	0% (0)	0% (0)	38.5% (10)	26.9% (7)
	延べ回数 26	126	52	18	62	8	0	0	16	9

表7には、対称詞の使い分け結果を示した。アンケート調査では「名字」や「名前」に「さん」を付けた対称詞の使用者が大多数であったが、手紙交換活動調査においては、「名前+さん」が最も多かった。この結果は、手紙の中で、相手である日本人学生に自分を名前で呼んで欲しいと依頼されたことや、日本人学生が手紙の最後を書く差出人名の欄に「名前」のみで書いていたことなどが要因だと考えられる。その他にも、学習者の中には「名前+様」を手紙本文中で使用する者が1人おり、宛名の影響が見られるが、宛名や差出人についての考察は紙幅の都合により別の機会に譲りたい。一方、日本人学生の対称詞の使い分けについて、高橋では、沖縄県内大学生は友人を「名前」で呼び捨てにする人が大多数であったが、本調査ではわずか2人(7.7%)であった。やはり面識のない人との手紙交換ということで、相手を「名前」だけで呼び捨てにすることがためらわれたのだと考えられる。

日本語学習者より日本人学生の使用回数が多い対称詞には、「フルネーム+

さん」の使用があるが、この結果の要因は、本調査の日本語学習者被験者の大半が中国人で、しかも短い中国人漢字名（名字と名前がそれぞれ漢字一文字ずつ）を持つペンパルが相手であることが考えられる。また、従来日本語教育で「あなたは～です」を頻繁に導入していたことを考えると、日本語学習者より日本人学生に「あなた」の使用者が多い結果は興味深い。前述したように、「あなた」は面識のない人間に対してよく使われるという原因によるであろう⁽¹¹⁾。

最後に、日本語学習者と日本人学生における対称詞のシフトの仕方について考察する。まず、日本語学習者による異なる回の手紙間におけるシフトでは、「名前+さん」から「名前」へ2人、「名字+さん」から「名前+さん」が1人、「フルネーム+さん」から「名前+さん」が1人であった。これらのシフトは、よりくだけた対称詞へのシフト（待遇レベル⁽¹²⁾が下がるシフト）であり、手紙の回が重なることによって親密さが増したからであると考えられる。ただし、待遇レベルが上がるシフト（「名前+さん」から「名字+さん」へ）をした者が1人いた。一方、日本人学生の異なる回の手紙間におけるシフトでは、「名字+さん」から「名前+さん」が2人、「フルネーム+さん」から「名前+さん」が3人、「名字+さん」から「ニックネーム」⁽¹³⁾が1人であった。これらのシフトも手紙の回が重なり親密さが増したことによる待遇レベルが下がるシフトである。また、「あなた」から他の対称詞へのシフトが7人いた。特に、1番最初の手紙では「あなた」を使用し、2回目以降の手紙で他の対称詞にシフトしていた日本人学生が多かった。この要因は、面識のない段階から、お互いを知っていくにつれて、対称詞がより具体的な表現に変化したからであろう。ただし、日本人学生の中にも、「名前」から「名前+さん」、「名前+さん」から「名字+さん」へと待遇レベルが上がるシフトを行った者も3人いた。これらの要因について、当事者にフォローアップインタビューを行ったところ、「さん」の付け忘れが1人、また手紙を交換する期間がかなり開き、前回の手紙で相手を何と呼んでいたのか忘れていたからと答えた人が2人であった。つまり、ミステイク⁽¹⁴⁾により生じたと推測されるシフト以外では、基本的に日本語学習者も日本人学生も、手紙の回数が

重なる毎に、待遇レベルが下がるシフトを行っていたことが明らかになった。

一方、1回の手紙中におけるシフトでは両グループ間の違いが見られる。日本語学習者では、「名前」の呼び捨てと「名前+さん（ちゃん）」の相互シフトを行った者が6人、「名前+様」から「名前+さん」へが1人、「名前+さん」から「名前+ちゃん」が1人、「フルネーム+さん」または「名前+さん」と「あなた」の相互シフトが2人いた。このように、日本語学習者は1回の手紙中で、敬称の有無や敬称の相違に関わらず対称詞をシフトさせていた。一方、日本人学生には、「あなた」と他の対称詞の相互シフトが5人、「フルネーム+さん」から「名字+さん」へのシフトが2人であった。「あなた」という対称詞は、名前や名字を含む他の対称詞が二人称でも三人称でも使えるのとは異なり、二人称代名詞としか使われることがない対称詞である。日本人学生のシフトの仕方から考察すると、二人称代名詞と他の対称詞のシフトは同一手紙内で行えるが、日本語学習者のシフトで見られたような他の対称詞同士のシフトは行えないことが分かる。ただし、日本人学生にも、他の対称詞同士のシフトである「フルネーム+さん」から「名字+さん」へシフトした者もいた。この要因は、前述したような短い中国人漢字名により、2つの対称詞の違いをさほど意識することがなかったからだと考えられる。

4. 結 論

本調査結果から、日本語学習者は自称詞・対称詞のどちらにおいても、性や地域による使用制限や、話し言葉または書き言葉のどちらかのみに頻繁に使われるなどの制限がある人称表現よりは、使用範囲が広い人称表現を好むことが明らかになった。ただし、沖縄県内でよく見られる地域呼称の一つで、友人に対して自称詞として用いる「自分」は、学習者にとっては他の地域呼称に比べ、比較的使いやすことが分かった。また、「あなた」という対称詞の学習者による使い分けは、日本語教育現場での取り扱い方の多様さを反映していた。

日本人学生との比較では、日本語学習者の自称詞の変異は日本人学生より少なく、更に、アンケート調査で日本語学習者が自ら感じているほど実際の

自称詞の使い分けに変異は表れなかった。対称詞を見ると、日本人学生は日本語学習者より「フルネーム+さん」や「あなた」を多用していた。「フルネーム+さん」は、中国人漢字名の短さが原因であり、「あなた」については、日本人は面識の少ない人間に対しては「あなた」を使うことが要因だと推測された。対称詞のシフトの仕方を見ると、異なる回の手紙における対称詞のシフト（表8）では、日本語学習者も日本人学生も大方回を重ねるごとに待遇レベルが下がるシフトを行っていた。一方、同一手紙内における対称詞のシフト（表9）では、両グループの差が顕著に表れた。日本語学習者は、敬称の有無や敬称の相違に関わらずシフトを行っていたが、日本人学生には、そのようなシフトは見られなかった。

表8 3.2節の結果のまとめ（異なる回の手紙における対称詞のシフト）

回を重ねる毎に待遇レベルが下がるシフト
・「名字+敬称」⇒「名前+敬称」⇒「名前」の呼び捨て（又は、「ニックネーム」） ・ 敬称ありの対称詞 ⇒ 敬称なしの対称詞 ・ 「あなた」⇒「あなた」以外の対称詞

表9 3.2節の結果のまとめ（同一手紙内における対称詞のシフト）

	待遇レベルが変化しないシフト	待遇レベルが変化するシフト
日本語学習者	・「あなた」⇔「あなた」以外の対称詞	・ 敬称の有無が異なる対称詞 ・ 敬称が異なる対称詞
日本人学生	・「あなた」⇔「あなた」以外の対称詞 ・「フルネーム」+さん⇒「名字」+さん	なし

5. 今後の課題

本調査では、日本語学習者による人称表現の使い分けの実態調査を行ったが、今後、学習者がなぜそのような使い分けを行うのかの要因を調査する必要がある。日本語学習者は母語においても、敬称の異なる対称詞をシフトさせるのかどうか、また、本調査結果のような対称詞のシフトの仕方を日本語母語話者はどのように受け取るのかについては、今後の課題としたい。更に、本稿では、紙幅の都合上、人称表現における待遇レベルの設定について十分取り上げることができなかったもので、この点については、また稿をあらためて論じることとしたい。

【謝辞】調査に協力してくれた学生の方々にお礼申し上げます。

【付記】本研究は平成14年度科学研究費助成金（若手研究（B）課題番号14710376）を受けた研究の一部をまとめたものである。

注

- (1) 高木（2002）によると、「地域語」とは「現在その地域で使われている、方言を含む共通的な言葉の総体」と定義されている。本稿において、地域語とは元来の琉球方言のみならず、ネオ方言として若い世代に使われるウチナーヤマトロも含めるので、高木の定義を援用する。
- (2) アンケート項目の分かりにくさを無くすために、各項目には会話例とその会話を表したイラストを添付した。
- (3) アンケート調査における日本語学習者被験者29名のバックグラウンドは女性12名、男性17名で、出身地は中国20名、台湾3名、韓国3名、マカオ2名、タイ1名である。年齢は20歳から30歳（平均23.4歳）であり、日本滞在歴は3ヶ月から28ヶ月（平均14ヶ月）である。
- (4) 最初の手紙の書き方指導以降に行ったペンパルプロジェクト（手紙交換活動）は、よりリアルな設定で行うため、学習者の自主性にまかせ、書くことは強制せず、活動への参加は任意とした。また、手紙は毎回便箋に入れて封をしてもらったので、講義の担当教官である筆者はその中身を確認していない。しかし、手紙交換活動の成果を授業の一貫として評価するために、学期中に何度か手紙の小テストを行った。
- (5) 講義の担当教官である筆者が毎回日本語学習者と日本人学生の手紙の受け渡しを行ったのは、郵送料がかかることを避けるためでもあったが、中には個人の住所を教えたくないという学生もあり、プライバシーを保護するためでもあった。
- (6) 本調査は、基本的に「日本語作文I」のクラス（受講生33名）と「日本語教授法」のクラス（受講生27名）で行ったが、「日本語作文I」クラスの学生数が33名と多かったため、日本語教育コース専攻に在籍中の3年生6人にも協力を仰ぎ、両グループメンバーが33名ずつ、1対1のペアとなるようにした。ペンパルプロジェクトに支障がないように、この6名にも、「日本語教授法」の授業で示したペンパル活動のための同

様の手続きや指導を行った。

- (7) 本調査データとして手紙を提供した日本語学習者被験者25名のバックグラウンドは、女性11名、男性14名である。出身地は中国17名、台湾3名、韓国2名、マカオ2名、タイ1名である。
- (8) 本調査データとして手紙を提供した日本人学生被験者26名のバックグラウンドは、大学3年生6名、大学2年生19名、科目等履修生(25歳)1名であり、うち女性21名、男性5名である。出身地は沖縄県内出身者13名、沖縄県外出身者13名である。
- (9) エイ・アイ・ケイ教育情報部『2001 日本語学校全調査』の調べによる。
- (10) 「あなた」や「おまえ」という対称詞は書き言葉においてのみ選択肢に加え、話し言葉においては、選択肢に入れなかった。注2でも述べたように、アンケート調査は各項目ごとにモデル会話例をあげたのだが、友人への話し言葉における対称詞のモデル会話は、相手への呼びかけであり、一般的に日本人による会話においては「あなた」や「おまえ」は呼びかけとして使われないことから、選択肢に入れなかった(本冊の小林の論文参照)。
- (11) しかし、もし日本人学生が「あなた」を外国人学生に対してのみ多用するのだとすれば、フォーリナーライティングの一種であるとも考えられる。この点の解明も今後の課題としたい。
- (12) 待遇レベルとは、三牧(2000:4)によると、「いくつかの可能な言語形式の中から選択された待遇表現の待遇度」のことで、三牧は文末と語の待遇レベルの表記記号を提案しているが、人称表現の待遇レベルについては言及していない。本稿では三牧による待遇レベルの定義は援用し、人称表現の側面からの待遇レベルの考察を試みるが、人称表現の待遇レベルの設定や表記記号などの詳細についてはまた稿をあらためて論じることにしたい。
- (13) 本稿における「ニックネーム」とは、本人の名前から全くかけ離れた呼び方(例「みなこ」という名前の場合の「ちゃんこ」)から、名前の一部と敬称をつけたもの(例「みなこ」という名前の場合の「みなちゃん」)を含める。
- (14) 本稿では、第2言語習得研究で一般的にいわれているように、ある事柄について一貫して間違える誤用は「エラー」、一過性の誤用は「ミステイク」と定義する。

引用文献

- エイ・アイ・ケイ教育情報部(2001)『2001 日本語学校全調査』(エイ・アイ・ケイ出版部)
- 杉本和之(1998)「日本語初級教科書における二人称の扱い」『愛媛国文と教育』31 号(愛媛大学教育学部国語国文学会) pp. 11-22
- 高木裕子(2002)「日本語の地域差と日本語教育」『2002 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 高橋美奈子(2001)「沖縄県における女子大学生の人称表現」『ことば』23 号(現代日本語研究会) pp. 78-90
- 日本語教育学会(2002)『2002 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 三牧陽子(2000)『対話における待遇レベル管理の実証的研究』平成9年度～平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- Okamoto, S. (1995) "‘Tasteless’ Japanese." In K. Hall and M. Bucholty(eds.), *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*. Routledge.
- Thomas, J. (1982) 'Cross-Cultural Pragmatic Failure.' *Applied Linguistics*. Vol. 4. No. 2. pp. 91-112

(たかはし みなこ)